

有能感タイプと主観的幸福感の関連 ：信頼感の差異に注目して

中村文香 (稲沢市立祖父江中学校)

奈良依璃子 (岡崎市立形埜小学校)

五十嵐哲也 (愛知教育大学養護教育講座)

Relations between Competent feeling type and Subjective well-being: Confidence

Ayaka NAKAMURA (Sobue Junior High School)

Eriko NARA (Katano Junior High School)

Tetsuya IGARASHI (Department of School Health Sciences, Aichi University of Education)

要約 自尊感情と仮想的有能感を含めた有能感の状況と主観的幸福感との関連性を検討するとともに、それらの関連性に対し信頼感がどのように関与しているかを検討した。その結果、自尊感情と仮想的有能感を含めた4つの有能感タイプごとに主観的幸福感の感じ方の違いが認められた。また、主観的幸福感の高さに関係するのは主に自尊感情であり、仮想的有能感の高低には左右されないことが示された。さらに、それらの関連性に対して「自分への信頼」が最も促進的に機能する可能性が示唆された。

Keywords : 仮想的有能感 自尊感情 主観的幸福感 信頼感

1. 問題と目的

人間が心理的に最良の状態では機能していること、つまり幸福を表す言葉に、主観的幸福感という言葉がある。人間のQOL (Quality of Life) に注目が集まってきたことから、人間の幸福は、経済的充実などの社会指標のような客観的な側面だけでなく、個人の主観的判断、心理的側面を重要視する必要が叫ばれるようになってきている (伊藤・相良・池田・川浦, 2003)。加えて、主観的幸福感に関する研究は、これまで見過ごされがちだった人間の精神機能のポジティブな側面に注目している (橋本・子安, 2012)。不適応に陥った者の特徴を検討することではなく、より適応的に生活するにはどうしたらよいかということを検討するため、あらゆる人々の人生をより充実したものにするのが期待されている (橋本・子安, 2012)。

この主観的幸福感を促進させる要因の一つとして、自尊感情がある。Rosenberg (1965) によると、自尊感情は一つの特別な対象、すなわち、自己に対する肯定的あるいは否定的な態度であると定義されている。そして、自尊感情は、深い友人関係を促進 (小塩, 1998) させ、抑うつを低減 (寺崎・網島・西村, 1999) し、人生に対する満足感を高める (寺崎・網島・西村, 1999) といったような効果を有するとされ、同時に主観的幸福感も高めるとされる (伊藤・小玉, 2005)。

特に主観的幸福感と自尊感情との関連については、その関連性が信頼感によって左右される可能性が指摘

されている。信頼感とは、自分あるいは他人 (他の対象) に対して抱く信頼できるという気持ちであると定義され、人一般に対しての肯定的な概念を形成しているとされる (天貝, 1995)。その上で、天貝 (1997a) は、特に青年期において、自分への信頼、不信が自尊感情に影響を及ぼすと述べている。また、牧野・田上 (1998) は、親密な他者を実感することが、主観的幸福感の変容のための最も重要な要因であると述べている。さらに、根建・田上 (1995) においても、親密な関係が、主観的幸福感の高い人の特徴の一つとして挙げられている。したがって、自尊感情は主観的幸福感を高める要因として考えられるが、その双方に対して自他への信頼が関与しているのである。

ところが、近年の研究で、自尊感情は、他者軽視の状況とともに検討する試みがなされ始めている (速水・木野・高木, 2004)。他者軽視は、自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視するものであり、それに伴って自己を有能であるとする感覚が生じる (松本・山本・速水, 2009)。この他者軽視に基づく仮想的有能感 (以下、仮想的有能感と呼ぶ。) によって、若者を中心とした現代人の多くが他者を見下し、軽視することで、無意識的に自分の価値や能力に対する評価を保持し、高めようとしている (速水, 2006a)。そして、この仮想的有能感の高い者のなかにも自尊感情が高い者はおり、そのような場合には、自分に自信があるからこそ

他者を低く評価して有能感を得ていると推測される(速水・木野・高木, 2004)。一方, 仮想的有能感が高いが自尊感情が低い者は, 自分に自信がないために防衛的に他者を低く評価して, 有能感を得ようとする可能性がある(速水・木野・高木, 2004)。このように, 個人の自尊感情の状態によって, 仮想的有能感の意味合いは異なってくると言える(速水・木野・高木, 2004)。そこで, 自尊感情と仮想的有能感の異なる2つの組み合わせによる, 4つの有能感タイプが提示された(速水・小平, 2006)。それによれば, 有能感は, 他者軽視も自尊感情も高い「全能型」, 他者軽視は高いが自尊感情が低い「仮想型」, 他者軽視が低く自尊感情が高い「自尊型」, 他者軽視も自尊感情も低い「萎縮型」に分類される(速水, 2011)。速水(2006b)によれば, 各タイプは以下のような特徴があるとされる。まず, 全能型は, 現実の能力も高く成功経験も豊富な人物, すなわち実際に高い能力を有する人物も含まれ得る。しかし, 他者からの批判や注意を拒んだり, 他者との比較なしに自分自身を「特別」だと思っただけで他者を見下すような言動を示したりすることがあるとされる。また, 仮想型は, 他者軽視が顕著で, 自信が無いにもかかわらず虚勢をはって他者を見下し, それにより間接的に有能感を高めようとしているタイプである。有能感が低すぎるために, 有能感が低すぎることから回避するという防衛的な意味合いがあるとも考えられている。さらに, 自尊型は, 自己評価は高いが, それが他者軽視には結びつかないタイプである。健全な意味での有能感を有するタイプであり, 他者を尊重していると考えられている。加えて, 萎縮型は, 自尊感情が低いけれども, それに対して他者軽視による防衛という手段をとらないタイプである。仮想的な有能感すら認められず, 最も自信のないタイプであると考えられている。その上で, 全能型・仮想型は怒りの情動経験が顕著である一方, 自尊型・萎縮型では悲しみの情動経験が顕著であること(速水, 2006b)や, 他国に比べ, 日本は仮想型, 萎縮型が多いこと(速水, 2011)などが明らかにされている。

しかし, これまで, 仮想的有能感と主観的幸福感との関連は検討されることがない。したがって, 他者軽視を伴うような自尊感情でも主観的幸福感を高めうるのかなど, 自尊感情と主観的幸福感との関連についてはいまだ明らかとなっていない点も多い。主観的幸福感と自尊感情の関連については, 信頼感の状況によって左右される可能性があることも考え合わせると, 自尊感情に他者軽視の状況も含めた「有能感タイプ」と主観的幸福感との関連はいかなるものか, そしてその関連性に信頼感がどのように影響しているのかについて, 検討することが急務である。そこで, 本研究においては, 有能感タイプによって主観的幸福感にどのよ

うな違いがみられるのかを検討する。さらに, そのような有能感と主観的幸福感との関連性に対して, 信頼感の違いがどのような影響をもたらすのかについても検討する。これにより, 自尊感情が低い, または他者軽視傾向が高くて, 信頼感さえあれば幸福感を高められるのかなどといった様々な可能性を明らかにできるだろう。これらを通じ, どのような有能感を有していても, より強く主観的幸福感を感じるために, 信頼感を活用できるのかを検討することが, 本研究の目的である。

2. 方法

2-1. 調査対象

A県内の国立大学1~4年生244名(男97名・女147名), B県内の私立大学1~4年生213名(男77名・女136名)を調査対象とした。回答数は457名であったが, 分析では無回答の項目があるものは全て除外した結果, 有効回答数は413名, 有効回答率は90.17%であった。

2-2. 調査内容

(1) 自尊感情

Rosenberg(1965)による自尊感情尺度の日本語版(山本・松井・山成, 1982)を使用した。山本・松井・山成(1982)において, 大学生を対象に妥当性が確認されている。また, 小塩・西野・速水(2009)において, 信頼性が確認されている。10項目からなり, 「あてはまらない」~「あてはまる」の5件法で求められた。

(2) 仮想的有能感

Hayamizu, Kino, Takagi & Tan(2004)による仮想的有能感尺度(version 2)日本語版(速水, 2006a)を使用した。小塩・西野・速水(2009)によって信頼性が確認され, 速水(2006a)によって妥当性が確認されている。なお, 本尺度は, 中学生以降すべての年代で使用できるよう, わかりやすい言葉に修正されている。他者批判や他者不信といった形式による他者軽視傾向を測定する11項目から構成される。「全く思わない」~「よく思う」の5件法で求められた。

(3) 主観的幸福感

伊藤・相良・池田・川浦(2003)の主観的幸福感尺度を使用した。伊藤・相良・池田・川浦(2003)において, 大学生を対象に尺度が作成されており, 信頼性と妥当性が検討されている。主観的な心理的健康を測定する15項目から構成される。「あなたは人生が面白いと思いますか」については「全くそう思わない」~「非常に」, 「過去と比較して, 現在の生活は」については「全く幸せでない」~「とても幸せ」, 「自分がやろうとしたことはやりとげていますか」については「全くできていない」~「ほとんどいつも」という4件法で求められた。

(4) 信頼感

高校生対象に作成された天貝（1995）の信頼感尺度（成人版）のうち、天貝（1997a）において成人期以降にも使用可能であるとされた18項目を使用した。本尺度は、天貝（1995）によって信頼性・妥当性が検討されており、天貝（1997b）において、年代によって項目の意味を捉え間違える可能性の高い項目が除かれている。「不信」、「他人への信頼」、「自分への信頼」の3つの下位尺度から構成される。「あてはまらない」～「あてはまる」の4件法で求められた。

2-3. 調査時期と手続

2014年10月～11月に質問紙法により実施した。調査の趣旨と内容を、調査対象の大学生に向けて直接説明した。直接説明できない場合には、調査の趣旨と目的を記入した「調査概要」、調査の実施方法を記入した「調査実施の手順」を、調査用紙とともに調査実施大学に送付した。どちらにおいても集団で一斉に行い、回収した。調査は、倫理的配慮から無記名で実施され、本研究のためにのみ使用されることが教示された。

3. 結果

3-1. 各尺度の分析

各尺度の信頼性を検討するために、クロンバックの α 係数を求めた。その結果、自尊感情尺度では $\alpha = .83$ 、仮想的有能感尺度では $\alpha = .84$ 、信頼感尺度では「不信」 $\alpha = .76$ 、「他人への信頼」 $\alpha = .79$ 、「自分への信頼」 $\alpha = .76$ であり、それぞれ十分に高い内的整合性を示した。よって各下位尺度の総和を項目数で除した値をそれぞれの下位尺度得点とした。

各尺度について性差を検討するため、 t 検定を行った。その結果、自尊感情については男性が女性よりも有意に高い（ $t[411] = 3.80, p < .001$ ）ことが示された。また、仮想的有能感についても男性が女性よりも有意に高い（ $t[411] = 3.33, p < .001$ ）という結果が示された。主観的幸福感については、男女で有意な差がみられなかった（ $t[411] = 1.19, n.s.$ ）。信頼感については、「自分への信頼」において男性が女性よりも高い（ $t[411] = 2.75, p < .01$ ）ことが示された。「不信」（ $t[411] = 1.13, n.s.$ ）、「他人への信頼」（ $t[411] = 0.01, n.s.$ ）については、有意な差がみられなかった。

このように、本研究で最終的な従属変数として検討する主観的幸福感について性差が認められなかったため、以後の分析においては全対象者について行うこととした。

3-2. 4つの有能感タイプによる差異の検討

速水・小平（2006）が示した自尊感情尺度と仮想的有能感尺度による4つの有能感タイプの分類を行い、有能感タイプごとの各尺度の違いを検討することとした。

群分けは、速水（2011）を参考に、自尊感情尺度と仮想的有能感尺度の2つの尺度を用いて4つの型に分類した。具体的には、他者軽視も自尊感情も高い全能型、他者軽視は高いが自尊感情は低い仮想型、他者軽視が低く自尊感情が高い自尊型、他者軽視も自尊感情も低い萎縮型である。区分方法は、仮想的有能感尺度（ $M = 2.67$ ）、自尊感情尺度（ $M = 2.90$ ）の平均値をそれぞれ算出し、低群・高群の組み合わせによって行った。その結果、全能型が99名、仮想型が102名、自尊型が93名、萎縮型が119名であった。

これらの群分けによる各尺度の違いを検討するため、群分けを要因とする一要因分散分析を行った。その結果、まず、主観的幸福感（Table 1）で有意な結果が得られ（ $F[3/409] = 47.27, p < .001$ ）、Tukey法による多重比較の結果、萎縮型・仮想型 < 自尊型・全能型であった。また信頼感（Table 2）について、「不信」で有意な結果が得られ（ $F[3/409] = 19.62, p < .001$ ）、Tukey法による多重比較の結果、自尊型 < 萎縮型・全能型、萎縮型・全能型 < 仮想型であった。また、「他人への信頼」（ $F[3/409] = 14.29, p < .001$ ）で有意な結果が得られ、Tukey法による多重比較の結果、萎縮型・仮想型 < 自尊型、仮想型 < 全能型であった。また「自分への信頼」（ $F[3/409] = 41.14, p < .001$ ）で有意な結果が得られ、Tukey法による多重比較の結果、萎縮型・仮想型 < 自尊型・全能型であった。

3-3. 有能感タイプと信頼感の高低による群分け

次に、有能感タイプと信頼感の高低によって、主観的幸福感に差があるか検討することとした。また、分析方法は、4つの有能感タイプをそれぞれ信頼性の下位尺度の高低群に分け、8群に分類し一要因分散分析を行うこととした。

Table 1 4つの有能感タイプによる主観的幸福感の差

(A) 萎縮型 ($n = 119$) $M(SD)$	(B) 自尊型 ($n = 93$) $M(SD)$	(C) 仮想型 ($n = 102$) $M(SD)$	(D) 全能型 ($n = 99$) $M(SD)$	F 値	多重比較
2.54 (.39)	2.97 (.32)	2.49 (.38)	2.9 (.31)	47.27 ***	A・C < B・D

*** $p < .001$

Table 2 4つの有能感タイプによる信頼感の差

	(A) 萎縮型 (n=119) M(SD)	(B) 自尊型 (n=93) M(SD)	(C) 仮想型 (n=102) M(SD)	(D) 全能型 (n=99) M(SD)	F 値	多重比較
不信	2.34 (.45)	2.01 (.53)	2.54 (.49)	2.33 (.48)	19.62 ***	B < A · D < C
他人への信頼	2.81 (.53)	3.16 (.44)	2.70 (.61)	2.97 (.50)	14.29 ***	A · C < B, C < D
自分への信頼	2.41 (.49)	2.96 (.46)	2.54 (.50)	2.99 (.43)	41.14 ***	A · C < B · D

*** $p < .001$

そのため、自尊感情尺度と仮想的有能感尺度の高低群による有能感タイプの4群分けに加え、その4群を信頼感の高低により2群分けし、計8群に分類した。群分けは、信頼感の下位尺度ごとに全対象者の平均値を算出し、その平均値を基準に対象者を高群、低群に分類することとした。

(1) 4つの有能感タイプ×「不信」(M=2.31)

萎縮型・「不信」低群は58名、萎縮型・「不信」高群は61名、自尊型・「不信」低群は71名、自尊型・「不信」高群は22名、仮想型・「不信」低群は35名、仮想型・「不信」高群は67名、全能型・「不信」低群は50名、全能型・「不信」高群は49名であった。

(2) 4つの有能感タイプ×「他人への信頼」(M=2.90)

萎縮型・「他人への信頼」低群は65名、萎縮型・「他人への信頼」高群は54名、自尊型・「他人への信頼」低群は16名、自尊型・「他人への信頼」高群は77名、仮想型・「他人への信頼」低群は54名、仮想型・「他人への信頼」高群は48名、全能型・「他人への信頼」低群は33名、全能型・「他人への信頼」高群は66名であった。

(3) 4つの有能感タイプ×「自分への信頼」(M=2.70)

萎縮型・「自分への信頼」低群は88名、萎縮型・「自分への信頼」高群は31名、自尊型・「自分への信頼」低群は21名、自尊型・「自分への信頼」高群は72名、仮想型・「自分への信頼」低群は64名、仮想型・「自分への信頼」高群は38名、全能型・「自分への信頼」低群は20名、全能型・「自分への信頼」高群は79名であった。

3-4. 有能感タイプと信頼感の高低との群分けによる主観的幸福感の違い

(1) 4つの有能感タイプ×「不信」の高低群による主観的幸福感の違い (Table 3)

8群間で主観的幸福感の有意な差が得られ ($F [7/405] = 21.76, p < .001$), Tukey法による多重

比較の結果、萎縮型両群および仮想型・「不信」高群 < 自尊型両群および全能型両群であった。また、仮想型・「不信」低群 < 自尊型・「不信」低群および全能型両群であった。

(2) 4つの有能感タイプ×「他人への信頼」の高低群による主観的幸福感の違い (Table 4)

8群間で主観的幸福感の有意な差が得られ ($F [7/405] = 30.30, p < .001$), Tukey法による多重比較の結果、萎縮型・「他人への信頼」低群および仮想型・「他人への信頼」低群 < 萎縮型・「他人への信頼」高群および仮想型・「他人への信頼」高群および自尊型両群および全能型両群であった。また、萎縮型・「他人への信頼」高群および仮想型・「他人への信頼」高群 < 自尊型・「他人への信頼」高群および全能型・「他人への信頼」高群であった。

Table 3 有能感タイプと「不信」の高低の群分けによる主観的幸福感の差

	主観的幸福感 M (SD)
(A) 萎縮L (n=58)	2.57 (.36)
(B) 萎縮H (n=61)	2.51 (.44)
(C) 自尊L (n=71)	2.99 (.32)
(D) 自尊H (n=22)	2.90 (.36)
(E) 仮想L (n=35)	2.62 (.39)
(F) 仮想H (n=67)	2.43 (.37)
(G) 全能L (n=50)	2.93 (.33)
(H) 全能H (n=49)	2.87 (.28)
F 値	21.76 ***
多重比較	A · B · F < C · D · G · H E < C · G · H

*** $p < .001$

Table 4 有能感タイプと「他人への信頼」の高低の群分けによる主観的幸福感の差

	主観的幸福感	
	<i>M (SD)</i>	
(A) 萎縮L (<i>n</i> =65)	2.41	(.37)
(B) 萎縮H (<i>n</i> =54)	2.70	(.37)
(C) 自尊L (<i>n</i> =16)	2.78	(.23)
(D) 自尊H (<i>n</i> =77)	3.00	(.32)
(E) 仮想L (<i>n</i> =54)	2.35	(.38)
(F) 仮想H (<i>n</i> =48)	2.66	(.32)
(G) 全能L (<i>n</i> =33)	2.80	(.37)
(H) 全能H (<i>n</i> =66)	2.95	(.26)
<i>F</i> 値	30.30 ***	
多重比較	A・E<B・C・D・F・G・H B・F<D・H	

*** *p*<.001

Table 5 有能感タイプと「自分への信頼」の高低の群分けによる主観的幸福感の差

	主観的幸福感	
	<i>M (SD)</i>	
(A) 萎縮L (<i>n</i> =88)	2.44	(.38)
(B) 萎縮H (<i>n</i> =31)	2.82	(.30)
(C) 自尊L (<i>n</i> =21)	2.81	(.33)
(D) 自尊H (<i>n</i> =72)	3.01	(.30)
(E) 仮想L (<i>n</i> =64)	2.36	(.36)
(F) 仮想H (<i>n</i> =38)	2.72	(.32)
(G) 全能L (<i>n</i> =20)	2.69	(.32)
(H) 全能H (<i>n</i> =79)	2.95	(.28)
<i>F</i> 値	34.35 ***	
多重比較	A・E<B・C・D・F・G・H F・G<D・H	

*** *p*<.001

(3) 4つの有能感タイプ×「自分への信頼」の高低群による主観的幸福感の違い (Table 5)

8群間で主観的幸福感の有意な差が得られ ($F[7/405]=34.35, p<.001$), Tukey法による多重比較の結果, 萎縮型・「自分への信頼」低群および仮想型・「自分への信頼」低群<萎縮型・「自分への信頼」高群および仮想型・「自分への信頼」高群および

自尊型両群および全能型両群であった。また, 仮想型・「自分への信頼」高群および全能型・「自分への信頼」低群<自尊型・「自分への信頼」高群および全能型・「自分への信頼」高群であった。

4. 考察

4-1. 4つの有能感タイプによる差異について

(1) 主観的幸福感

自尊型・全能型は, 萎縮型・仮想型よりも主観的幸福感が高いことが示された。このことは, 主観的幸福感の高さと関係するのは自尊感情であり, 仮想的有能感の高低には左右されないことを示唆している。牧野・田上 (1998) は, 主観的幸福感の主要因として自己受容を挙げているほか, 伊藤・小玉 (2005) は, 主観的幸福感に対して自尊感情が促進的に影響するとしており, 本研究の結果もこれらに一致したと考えられる。また, 速水 (2006b) は, 仮想的有能感の高い者は, 妬み等の負の感情を抱きやすい一方, 自分自身に対する肯定的感覚を抱いていると指摘している。このことから, 仮想的有能感の高い者は, ポジティブな感情とネガティブな感情が同居しているために, 感情が安定していないのではないかと推測される。そのため, 主観的幸福感についても感じ方が一定でなく, 仮想的有能感によっては, 主観的幸福感は左右されないと考えられる。

(2) 信頼感

一方, 信頼感については, 各下位尺度によって異なる結果が得られた。まず, 「不信」では, 萎縮型・全能型は自尊型よりも高く, 仮想型は萎縮型・全能型よりも高いことが示された。他者軽視傾向が高く自尊感情が低い群でもっとも「不信」が高く, 他者軽視傾向が低く自尊感情が高い群でもっとも「不信」が低い結果となった。したがって, 自尊感情の高低に加え, 他者軽視傾向の高低によっても「不信」が左右されているのではないかと推測される。速水 (2011) によると, 他者軽視傾向の高い者の特徴として, 日常的に負の感情をもちやすく負の対人感情をもちやすいことがあるとされる。本研究の結果からは, このようあらゆる生活場面で負の感情を抱く背景に, 様々な対象に対する基本的な不信感が存在しているのではないかと推測される。加えて, 萎縮型と自尊型, 仮想型と全能型のように, 同程度の他者軽視傾向を有していても, 自尊感情の違いによって「不信」に差がみられたことにも注目すべきである。天貝 (1997a) によると, 自尊感情は, 自分を積極的に信じようとする態度に加え, 「不信」を克服しようとするなかで獲得されるものであるという。すなわち, 自尊感情の高い者は, 「不信」を克服した者であると考えられるため, 自尊感情の高い自尊型・全能型で「不信」が低い結果になったと推測される。

「他人への信頼」では、自尊型は萎縮型・仮定型よりも高く、全能型は仮定型よりも高いことが示された。したがって、概して自尊感情が「他人への信頼」と関連していることが推測される。しかし、自尊型と全能型との間にも「他人への信頼」に差がみられたことから、自尊感情の高さに加えて他者軽視の低さが「他人への信頼」に関わっていることも推測される。天貝 (1997a) によると、信頼感、自尊感情に対して、生涯にわたって肯定的な影響を及ぼすという。また、速水 (2006b) は、自尊型は他者を尊重しているとしている。他者を尊重できるということは、すなわち、他人を信頼できることにつながると考えられる。よって、自尊感情の高い自尊型・全能型で「他人への信頼」が高い結果となり、その中でも、純粋に自尊感情のみが高い自尊型において、もっとも「他人への信頼」が高い結果となったと推測される。

また、「自分への信頼」では、自尊型・全能型は萎縮型・仮定型よりも高いことが示された。したがって、他の下位尺度とは異なり、「自分への信頼」は、自尊感情のみによって左右されていることが推測される。伊藤・小玉 (2005) によると、自尊感情は、自分自身に対する肯定的感情であるという。自分を肯定的にとらえ、価値ある人間であるとすることは、すなわち、自分を信頼できるということだと考えられ、自尊感情が自己への信頼感につながることは了解できる。また、この結果は、天貝 (1997a) にも一致するものである。しかし、仮想的有能感が関与しない点について、速水・木野・高木 (2004) は、仮想的有能感をもつ者は、自己の直接的な経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向にあると指摘している。したがって、仮想的有能感が高い者は、自分自身の内面に基準をおかない傾向にあると推察されるため、「自分への信頼」は仮想的有能感によって左右されないと推測される。

4-2. 4つの有能感タイプおよび信頼感の高低と主観的幸福感との関連について

4つの有能感タイプおよび信頼感の高低と主観的幸福感との関連について検討したところ、まず、有能感タイプについては、主として仮想的有能感よりも自尊感情が関連していることが示された。これは、先に示した結果と同様である。ところが、信頼感についても併せて検討したところ、その有能感タイプへの関わり方や、主観的幸福感への関わり方は、下位尺度によって異なっていた。

まず、「不信」については、たとえ他者軽視傾向が低く自尊感情が高くても、「不信」が強ければ、「他者軽視傾向が高く自尊感情が低く、かつ不信が低い者」と同様の主観的幸福感を抱くということが明らかとなった。他者軽視傾向が低く自尊感情が高い者、すなわち自尊型に分類される者は、自己を受容し、他者を

尊重できる (速水, 2006b) とされており、本研究でも同様の結果を得ている。しかし、ここでの結果は、そうした特徴をもつ自尊型であっても、自他への不信が増幅する出来事が生じれば、真逆の特徴をもつ「仮定型」と同程度まで主観的幸福感が低下するというを示している。本来、自他への尊重の程度が高い自尊型にとって、自他への信頼を喪失するような出来事を経験することは、自らの性質と矛盾する大きなストレス事態に相当するだろう。したがって、自尊型においては、自他への不信感を高めないようにすることが、主観的幸福感の維持には重要であるということが指摘できる。

さらに、「他人への信頼」については、自尊感情の低い群において、「他人への信頼」の高低によって主観的幸福感が左右されることが明らかとなった。萎縮型や仮定型といった自尊感情の低い者において、そもそも「他人への信頼」が低いということは、既に本研究でも明らかとなっている。しかし、ここでの結果は、そうした特徴をもつ者であっても、「他人への信頼」を感じる出来事が生じれば、より強く主観的幸福感を感じることもできるというものであった。これは、他者を「頼るに足る存在」と認識すること (竹澤・小玉, 2004) によって、自分を肯定する気持ちが低くとも精神的健康度を維持できるということを示しているだろう。したがって、千原 (2012) が示すような対人関係トレーニングによる信頼感向上の試みは、特に自尊感情が低い者にとって、主観的幸福感をも高めていく可能性があるかと推測できる。

加えて、「自分への信頼」については、たとえ他者軽視傾向が高い、もしくは、自尊感情が低くても、「自分への信頼」が高ければ、主観的幸福感を高く感じるということが明らかになった。すなわち、「自分への信頼」は、自尊感情や他者軽視傾向という特徴を超えて、主観的幸福感を大きく左右する要因であることが推測された。そもそも、「自分への信頼」は、変動的な「他人への信頼」や「不信」とは異なり、発達に伴ってほぼ安定して上昇する傾向にある (杉原・天貝, 1996)。また、信頼感の生涯発達においては、青年期における「対人的影響源からの他者信頼」から、老年期における「能動的自己信頼」へと変化することが指摘されている (天貝, 1998) これらの指摘を踏まえると、「自分への信頼」は、信頼感の他の側面に比して、より基本的かつ重要な領域であると考えられ、そのために他の変数よりも主観的幸福感を大きく変化させる要因となりうるのだと推測される。この点に関連し、Fordyce (1974) は、「あるがままの自己を受容すること」が幸福になる条件であると指摘し、自己を受容している者は他者の意向等について多くを考えすぎないと述べている。本研究の結果はこれを支持するものであり、どのような者にとっても、自己への信

頼感を高めることで主観的幸福感を向上させることができる可能性が示唆された。

4-3. まとめおよび今後の課題

本研究の結果、自尊感情と仮想的有能感を含めた4つの有能感タイプごとに主観的幸福感の感じ方の違いが認められた。具体的には、まず、主観的幸福感の高さに関係するのは自尊感情であり、仮想的有能感の高さには左右されていないことが示された。また、それらの関連性に対し、「自分への信頼」がもっとも促進的に機能する可能性が示唆された。

しかしながら、本研究ではいくつかの課題が残されている。まず、第一点は、性差についての検討である。本研究では、最終的な従属変数である主観的幸福感に性差が認められなかったため、男女別の検定を行わなかった。しかし、先に述べたように、主観的幸福感を構成する内的基準に、そもそも性差はなかったのかは検討していない。内的基準に性差があれば、たとえ同程度の主観的幸福感を感じていても、その拠って立つ判断根拠が異なることとなり、主観的幸福感の意味も異なってくると考えられる。今後、その点を考慮した検討が必要であると考えられる。

第二点は、信頼感において、年齢段階による変動を検討できなかったことである。天貝(1997a)は、青年期から成人期前期は、自分や他人に対する否定的な気持ち乗り越えながら、信頼感を確立させていく「信頼感の模索期」であると述べる。この時期に本研究の対象者は属していると考えられ、信頼感の変動がみられる年代であると考えられる。異なる年齢集団を同時比較し、大学生期の特徴を見出すような視点が求められよう。また、同じ年齢集団であっても、信頼感の発達状態が異なる可能性もある。この点については、天貝(1995)が、信頼感と不信感についてその質やバランスおよび安定性が重要であると指摘している。これらの観点を考慮し、さらなる検討の蓄積が必要である。

【謝辞】

本研究は、第一・第二筆者が実施し、第三筆者が指導した平成26年度愛知教育大学養護教諭養成課程の卒業論文を、加筆・修正したものです。実施にあたり、調査に快くご協力いただきました大学生の皆様、ならびに先生方に心より感謝申し上げます。

【引用文献】

- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, **43**, 364-371.
- 天貝由美子 1997a Self-esteemを規定する要因としての信頼感—その生涯発達の变化— カウンセリング研究, **30**, 103-111.
- 天貝由美子 1997b 成人期から老年期に渡る信頼感の発達—家族および友人からのサポート感の影響— 教育心理学研究, **45**, 79-86.
- 天貝由美子 1998 信頼感の生涯発達モデルの作成(その1) 日本教育心理学学会発表論文集, **40**, 7.
- 千原美重子 2012 学生への対人関係トレーニングが及ぼす心理的影響—特に実施後の基本的信頼感の分析から— 日本教育心理学学会発表論文集, **54**, 647.
- Dermer, M., Cohen, S.J., Jacobsen, E., & Anderson, E.A. 1979 Evaluative judgements of aspects of life as a function of vicarious exposure to hedonic extremes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 247-260.
- Diener, E. 1984 Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, **95**, 542-575.
- Fordyce, M. W. 1974 *The psychology of happiness: A brief version of the fourteen fundamentals*, Florida, Cypress Lake Media.
- 橋本京子・子安増生 2012 楽観性とポジティブ志向が幸福感到及ぼす影響 心理学評論, **55**, 17.
- 速水敏彦 2006a 他人を見下す若者たち 講談社
- 速水敏彦 2006b 若者の仮想的有能感の認知と怒りおよび悲しみの情動生起との関連 平成15・16・17年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書(課題番号 15530423)
- 速水敏彦 2011 仮想的有能感研究の展望 教育心理学年報, **50**, 176-186.
- 速水敏彦・小平英志 2006 仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連 パーソナリティ研究, **14**, 171-180.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2004 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, **51**, 1-8.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2005 他者軽視に基づく仮想的有能感—自尊感情との比較から— 感情心理学研究, **12**, 43-55.
- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H., 2004. Assumed-competence based on under valuing others as a Determinant of Emotions : Focusing on Anger and Sadness. *Asia Pacific Education Review*, **5**, 127-135.
- 伊藤正哉・小玉正博 2005 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討 教育心理学研究, **53**, 74-85.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 2003 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **74**, 276-281.
- 牧野由美子・田上不二夫 1998 主観的幸福感と自己受容の関係 心理学研究, **69**, 143-148.
- 松本麻友子・山本将士・速水敏彦 2009 高校生における仮想的有能感といじめとの関連 教育心理学研究, **57**, 432-441.
- 根建由美子・田上不二夫 1995 ハピネストレーニン

- グプログラムが主観的幸福感の変容に及ぼす効果
教育心理学研究, **43**, 177-184.
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人
関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-
290.
- 小塩真司・西野拓朗・速水敏彦 2009 潜在的・顕在
的自尊感情と仮想的有能感の関連 パーソナリティ
研究, **17**, 250-260.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent
self-image*, Princeton, N.J., Princeton University
Press.
- 杉原一昭・天貝由美子 1996 特性的および類型的観
点から見た信頼感の発達 筑波大学心理学研究, **18**,
129-133.
- 竹澤みどり・小玉正博 2004 青年期後期における依
存性の適応的観念からの検討 教育心理学研究, **52**,
310-319.
- 高木邦子・速水敏彦 2001 悲しみと怒りの情動を分
けるもの ―自己責任の認知と自己愛的有能感の影
響― 日本教育心理学総会発表論文集, **43**, 561.
- 寺崎正治・綱島啓司・西村智代 1999 主観的幸福感
の構造 川崎医療福祉学会誌, **9**, 43-48.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された
自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.